
天使の仕事 ～世界観設定～

アオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の仕事 ～世界観設定～

【Nコード】

N3167T

【作者名】

アオ

【あらすじ】

ここでは『天使の仕事』の世界観をアオとアオイの会話形式で紹介します。ネタバレは特に無いですが、やはり若干はあると思うので、そういうのが嫌な人は本編で多少の紹介をされた後に見てください。尚、作者がこちら辺かな、と思った話の後書きに更新した設定の名前を書いておきますので、それを参考にしても構いません。

例：世界観設定に【妖術】を追加しました。（天使の仕事第4話『

天使の撮影』の後書きから抜粋）一応最初の方に紹介された話数を書いておきます。

妖術（前書き）

こんにちは、アオです。

天使の仕事（世界観設定）第一弾の投稿です。

この設定集は必読というわけではありませんが、本編をよりよく楽しみたい場合はお読みください。

ここでは本編である程度紹介された世界観設定を紹介していきます。

これはおまけなので、基本的に文章は短いです。（同じおまけでもキャラ紹介の方は異様に長いですが）

それでは、今回紹介する設定は？妖術？です。

妖術

アオイ「天使の仕事、世界観設定、第一弾！」

アオ 『スタート！』

・・・

アオ 『何、この出だし』

アオイ「だって、最初はこれ位のテンションの方がいいと思わない？」

アオ 『それはつまり、後からだんだんと下がってくるって事かな』

アオイ「いつもそんな感じじゃなかったっけ」

アオ 『そんな事はない！・・・はず・・・だ、よ？』

アオイ「ほらほらテンション下げない」

アオ 『いやさ、でもこれテンションはあんまりいらんだよね』

アオイ「どうしてよ？」

アオ 『だって、ぱーっとやって終わらせるつもりだから』

アオイ「え、なんでよ」

アオ 『特に話す内容がないからね。ぱぱっと説明やって終わらせるつもりだよ』

アオイ「そんなんじゃ読者の心は掴めないわよ！」

アオ 『いやでもさ、世界観設定までだらだらと説明するのは読む方としても遠慮して欲しい所』

だと思つよ』

アオイ「いつも最後にまとめたやつを載せてるじゃない」

アオ 『自分は経験値が低いから面白くする事が難しいんだよ』

アオイ「それじゃ、どうやって説明するの？」

アオ 『自分が設定を喋るから、アオイはそれを補足するよつな形だ』

アオイ「最後の方にはいつも通りまとめたやつを載せるのよね」

アオ 『もちろん』

アオイ 「何か少し寂しい気がするよな」

アオ 『大丈夫。慣れてくればまただらだと説明するようになると思うから』

アオイ 「それはそれで駄目でしょ」

アオ 『もちろん、だらだと面白いように紹介するさ』

アオイ 「そう、分かったわ」

アオ 『じゃ、設定説明を始めますか』

アオイ 「最後の方にまとめたやつを載せますので、それだけを見たい方は下までスクロールして

下さい」

アオ 『でも説明がいろいろとややこしいと思うので読むことをお勧めします』

天使の仕事〜世界観設定〜 妖術

アオ 『じゃあ今からある程度まで喋るから』

アオイ 「まかせて」

アオ 『妖術とは、概念を強化する術です。他にも、モノに籠められた想いを強化することが

出来ます」

アオイ 「ここで終わり？」

アオ 『うん。じゃあアオイ、説明お願い』

アオイ 「分かったわ」

アオイ 「概念を強化、つまりはモノの存在理由を強化すると考えてくれて構わないわ。例えば

はさみに妖術をかけたら、はさみは切ることが存在理由だから良く切れるはさみになる

わね。他にもそのモノが持つ能力、またはさみで説明すると、はさみは何かを切るモノ

だから、切るといふ項目で特別な事が出来たりするわね。
次にモノに籠められた想いを

強化する、これは二話目でやったわね。麻衣さんがメスに
籠めた想いを私が妖術で強化

する。でもそれだけじゃ足りないから、メスの概念？人を
救う??？病気を切る?という

概念を強化して麻衣さんの病気を切って弱らせたのよ」

アオ 『自分の説明よりは分かりやすくして具体性を帯びてたけどや
っぱり少し分かりづらいな』

アオイ「確かにこれは結構きついかもね」

アオ 『多分下のまとめたやつだけを読んで分らないかもね』

アオイ「アオ、頑張つてね」

アオ 『うん・・・』

アオイ「じゃあ、次の説明をして」

アオ 『さきほど説明したとおり、妖術はモノの概念を強化します。
しかし妖術には他にもあと

二つ出来ることがあります。その一つ目が？妖精?の強化
です』

妖精については妖精の項目で説明しますのでそちらを見てください

アオイ「妖精の強化とは、簡単に言うと先程の概念の強化のパワー
アップバージョンです。

妖精はそれ自身が概念の塊見たいなものでそれを強化
すると凄い事になります」

アオ 『凄い事になるって、それでいいのかな?』

アオイ「いいんじゃない」

アオ 『うーん』

アオイ「ほら次にいくわよ」

アオ 『妖術で出来るもう一つの事、それが妖精を従えることです』

アオイ「先程と同じじゃないかと思う方、実は違うんです。先程は
ただ妖精を強化しただけでそ

の妖精を扱うことが出来ません。そこでこの二つ目で妖精を従えて初めて能力が使える

す。妖精には自由意志があるので、もし従えることが出来なかった場合には能力はおろ

か、概念の強化すら行えません。何故概念の強化も行えないのかというと、モノには最

初から妖精が宿っている訳ではなく、長い時間をかけて妖精が宿ります。しかし、妖精

は宿ってもそれだけではまだ不完全、寝ているような状態で、妖術を使うことによつて

妖精を覚醒させます。そうするとモノ「妖精なので、妖精を従えることが出来なかった

場合能力が使えないとはそういう理由からです」

アオ 『ごくろうさま』

アオイ「結構疲れるわね、コレ」

アオ 『でもこれだけ言ってもまだ分かりづらい所があったりするんだろっね』

アオイ「私たちもまだまだ修行不足ね」

アオ 『そりゃそうだ』

アオイ「とりあえずこれでもう妖術の説明は以上かしら」

アオ 『ま、そうだね』

アオイ「もうちょっと日本語の勉強をしないとね」

アオ 『善処します』

アオイ「分からない所などがありましたら感想にて質問してください」

アオ 『それでもちゃんと答えられるかどうかは分かりませんが、出来る限りで頑張りたいと

思います』

アオイ「それではまた次回にお会いしましょう」

アオ 『さようなら』

アオ 『最後に設定を纏めたものを載せます』

世界観設定 妖術

妖術 モノに宿っている概念や想いを使い、術を行使する。

妖術の基本は概念の強化で、これが根本となる。他にも妖術は妖精の強化、妖精を従える事が出来る。妖精が宿っているモノで妖術を使えばもう一段階上の能力を使うことが出来る。妖精を従えた場合はモノに能力が使えるが、妖精を従えることが出来なかつた場合はその妖精が宿っているモノを使うことが出来ない。妖精を従えてはいるが、嫌われている場合には能力と質が下がる。

妖術（後書き）

天使の仕事　〜世界観設定〜第一弾、いかがでしたでしょうか。
今回の紹介で妖術についてはつきりと分かった方がいましたら、自分
分は尊敬します。

かなり分かりにくいと思いますが、分かりやすい説明を書けるよう
努力しますので、気長にお待ちください。

今回の説明では妖術だけでなく、？妖精？まで出てきてしまった
のは、自分の力が及ばなかったせいです。申し訳ありません。

代わりとしてはアレですが、妖精についての紹介文も同時投稿し
ました。

この二つを読んで設定を合わせれば理解に繋がると思います。

妖精（前書き）

こんにちは、アオです。

今回は？妖精？についての設定紹介をします。

前回の妖術の紹介で多少の設定は暴露してしまいましたが、それだけで尽きてしまうような柔な設定ではありません。

・・・すいません、調子に乘りました。めっちゃくちや穴だらけです。でも、最初の方が前回で読んだな、と思うだけで中盤辺りからは新しい？設定です。妖術の紹介で多少出てきた妖精の設定も、この時のための予習だと思っていただけだと幸いです。

それでは最初に書きましたが、今回は？妖精？について紹介します。

妖精

アオイ「世界観設定コーナー第二弾、始まります!」

アオ「なんか使い方間違ってるない?」

アオイ「なんのよ」

アオ「第〓弾っていう部分」

アオイ「そうかしら」

アオ「わかんないけどそんな感じがした」

アオイ「大丈夫よ、細かいことは気にしない!」

アオ「分かったよ」

アオイ「それで、今回紹介する世界観は何かしら」

アオ「前回めっちゃくちや出てきた妖精について説明します」

アオイ「そういえばかなり妖精について言ってたわね。何で妖精が先じゃなかったの?」

アオ「出てきた順でやろうと思ったところだった」

アオイ「なるほど・・・」

アオ「でもあんまり詳しい事は言ってたはずだから気にせずGO!」

アオイ「なんかもう投げやり感があるわね」

アオ「それじゃあ説明を始めたと思います!」

アオイ「最後の方にまとめたやつを載せますので、それだけを見たい方は下までスクロール

して下さい」

アオ「でも説明がいろいろとややこしいと思うので読むことをお勧めします」

天使の仕事〓世界観設定〓 妖精

アオ「前回で割と妖精について触れたから結構内容がかぶってる

から』

アオイ「大丈夫って言ってなかったっけ？」

アオ「そんな事言っていないぞ。ちゃんと読み直してみなさい」

アオイ「分かったわよ・・・さっさと説明にはいって」

アオ「妖精は、長い時間をかけてモノに宿ります」

アオイ「まあ、最初はそんな所が妥当でしょうね」

アオ「それじゃアオイ、お願い」

アオイ「補足は必要ないでしょうけど、さっき言ったとおりの意味で、そのモノが長い間形を

保ち続けていたら妖精が宿るわね」

アオ「本当にそのままだね」

アオイ「だって今のは補足する必要ない情報だったじゃない」

アオ「そうですね、すいません」

アオイ「ほら、次を言って」

アオ「他にも妖精を時間をあまりかけずに宿らせる事は可能で、モノに籠める想いが強いほど、早く宿ります」

アオイ「二話目で麻衣さんにメスに想いを籠めてもらったのは妖精を宿らせるためだったの。

でもいくら強く想いを籠めても、普通の人がちよっと籠めた程度じゃ、長い時間を必要

とする妖精の構築を数分まで縮めることは出来ない。だから麻衣さんに施した仕掛けと

もう一つ、メスにもちよっと細工を施したの。その細工はメスに妖術をかけて、籠めら

れた想いを力技で無理やり妖精に構築して、それで妖術を使って麻衣さんを助けたのよ」

アオ「こちらの補足だけでなく二話目の説明までするとは凄いな、アオイ」

アオイ「ここら辺を早く知ってもらわないと楽しめないでしょうか

らね」

アオ 『助かったよ。ありがとう』

アオイ 「もう、お礼はいいから次を言いなさいよ」

アオ 『別にいいけど、何か質問とかある？』

アオイ 「あ、じゃあ一ついいかしら」

アオ 『何？』

アオイ 「妖精が宿るまで長い時間がかかるって言ったけど、具体的にはどれくらい？」

アオ 『そうだね、何も想いを籠められずに存在し続けたただけとしても10年もたてば普通に

妖精が宿ってるな』

アオイ 「て言うことは、最低でも10年位必要ってこと？」

アオ 『別にそういう事でもないんだな』

アオイ 「じゃあどういう事よ」

アオ 『妖精にも個体差があつて、構築が早い妖精、遅い妖精、能力が高い妖精、低い妖精と

いろいろあるからね』

アオイ 「そうなんだ。ところでさっきから構築と宿るを使い分けて言ってるけど、構築と宿るの

違いを言わないと読んでる人達は意味が分からないわよ」

アオ 『ほとんど同じ意味です。妖精は長い時間をかけて体を構築する、そして出来た体をモノ

に宿らせるってことです。簡単に言うと、構築という過程を経てモノに宿るという結果

に至る訳です』

アオイ 「なるほどね」

アオ 『じゃあ次にいこうか』

アオイ 「よろしく」

アオ 『妖精は時間が経てば経つほど強力になります。他にも籠められた想いの強さで出来るこ

とと強さが変わります』

アオイ「妖精は時間が経つほど強力になっていく、という事は時間が経つほどに制御が難しくな

るの。力が大きくなるのはいいけど、それも使い手が扱いきれる程度でなければならな

い。妖精といい主従関係が保てればこれほどいいパートナーはいないけれどね。

因みに二話目で使ったメスに宿る妖精は残念ながら消えてしまったわ。強く想いを籠め

れば確かに早く要請を宿らせることは可能だけど、それでもやっぱりゆつくり時間をか

けて宿らせた妖精の方が強くて丈夫なのよ」

アオ 『元気だしなよアオイ』

アオイ「うん。でもやっぱりあの子には悪いことしちゃったな」

アオ 『妖術つてのは、つまりは存在意義の強化だ。自分の存在意義を全うして消えたんだから

あのメスだってきつと誇らしい気分だと思うぞ』

アオイ「ありがとう、アオ」

アオ 『空気が少しブルーだな。ほら、テンションあげて次にいくぞ』

アオイ「わかったわ。それじゃアオ次にいきましょう」

アオ 『妖精は体を実体化していないときはモノに宿っているのが普通です。その状態を休眠

状態といいます。妖術はその休眠状態の妖精を起こして術を行使します』

アオイ「ってこれじゃ妖術の説明じゃない」

アオ 『いや、これは妖術の時に言いたかったんだけど、妖精について深く触れなくちゃ言えな

さそうだったから言えなかったんだ』

アオイ「そうなの、まあ、いいわ。説明を続けて」

アオ 『妖精は体があるので実体化することは可能ですが、最初のうちは無理です。だんだんと』

『靈力の扱いに慣れてきて初めて実体化することが可能です。でも実体化するには靈力が』

『必要で、その体を保ち続けるのにも靈力が必要なので普段はあまり実体化することは』

『ありません』

アオイ 『今の説明どおり妖精は体を実体化させるのに靈力を使うからあまり実体化はしていない』

『わね。するとしてもマスター^{天使}の仕事の手伝いの時くらいかしら』

アオ 『アオイは手伝ってもらったりするの?』

アオイ 『たまにね。料理を作ってもらったりとかしてるわ』

アオ 『因みに大多数の天使には妖精が一体はいます』

アオイ 『なにか事情とかがない限り、いて損になることはないものね』

アオ 『あと、休眠状態に入っている時は天使などにも妖精が宿っている位しか分かりません』

『が、実体化している時は、靈感があれば生身の人間にも見ることが出来ます』

アオイ 『ふう、もう終わったかしら』

アオ 『いや、まだあるよ』

アオイ 『え、本当に?』

アオ 『という事で頑張ろうか』

アオイ 『分かったわよ』

アオ 『妖精が宿っているモノは妖精が消えてしまおうと使えなくなってしまう。しかし、』

『その逆、つまり妖精が宿っているモノが壊れたりしたとしても妖精はまだ少しの間は』

『生きています。マスターがいる場合はそのまま生きていら』

れるのですが、マスターが

いない場合は消えてしまいます。モノが壊れてから生きて
いられる時間の長さは妖精の

力が大きいほど長く生きていることが出来ます。その間に
妖精は自分のマスターを探し

たりします」

アオイ「これは四話目の時がいい例ね。絵美ちゃん（四話目でた
妖精の名前）は自分が居た

カメラが壊れてからすぐに私がマスターになったから生き
ていることが可能だったのよ」

アオ「ここで一呼吸入れたいところだけどあともうちょっと説明
するね」

アオイ「わかったわ」

アオ「妖精は自分が宿っていたモノが壊れてしまっても、それと
似たものだったら宿る事が

出来ます。しかし、その際若干性格が変わってしまうこと
もあります」

アオイ「絵美ちゃんの性格はどうなったのかしらね」

アオ「一応あの後あのインスタントカメラに宿らせたんでしょ？」

アオイ「ええ、そうよ」

アオ「若干ケチな性格になってるかもね」

アオイ「それだけだったらまだいいんだけどね」

アオ「ま、なるようになるさ」

アオイ「そうよね。あとさっきの説明の補足だけど、妖精は宿るモ
ノを変えたら消える心配は

なくなるわ。妖精は自分で宿るモノを変えたり出来ないか
らマスターを探すのよ」

アオ「ま、こんな所かな」

アオイ「あら、これでおしまい？」

アオ「そっだね」

アオイ「何か他に忘れてる事とかはないの？」

アオ「あるかも知れないけど今は思い出せない」

アオイ「じゃあどうするのよ」

アオ「思い出したときに編集する」

アオイ「うわ、せこ。そんな事やってたら読者が離れていくわよ」

アオ「すいません離れないで下さい、お願いします」

アオイ「いきなり腰が低くなったわね」

アオ「とりあえず重要な補足点などがあつたらタイトルの下の作品説明辺りにでも書いて

おきます」

アオイ「そうしたらその内いつぱいになっちゃわないかしら」

アオ「そんな事にはしない様にするし、ならないと思う。書いておく期間も1ヶ月位だし」

アオイ「あら、そうなの」

アオ「書いて1ヶ月したら消しておく」

アオイ「そういうのって『小説家になろう』ではやっていいのかしらね」

アオ「本編をにあまり関係がないからいいんじゃないかな」

アオイ「すいません、もしだめだったら言ってください」

アオ「お願いします」

アオイ「それじゃ終わりにしましょうか」

アオ「そうだね」

アオイ「それでは次回にまたお会いしましょう」

アオ「さようなら」

アオ「最後に設定を纏めたものを載せます」

世界観設定 妖精

妖精 モノに籠められた強い想いや蓄積された年月、モノが

経験したりした事などが意思や霊的な力タチを持った自然的存在。

籠める想いが強いほど早く宿り、強い能力を持つ妖精となる。妖精

が宿するには長い年月が必要とされ、早いモノで3年、遅いモノでは20年以上かかったりする。妖精は時間の経過と共に能力が上がり、保有する霊力も多くなる。しかし、妖精が強くなりすぎると制御が難しくなる。しかし、妖精との関係が良好の場合は制御が容易いので、小さな力で大きな力を扱うことが出来る。妖精は体を実体化することが出来るが、霊力を消費するため、普通は実体化することはあまりない。するとしても、それは何か手伝って欲しい事がある時ぐらいである。実体化した時は、生身の人間でも霊感があれば見ることが出来る。因みに妖術で扱われていない通常時を休眠状態といい、休眠状態の時は天使でも存在を感じられる位である。妖精は自分の媒体（自分が宿っていたモノ）が壊れてしまっても少しの間は生きていられるので、その間にマスターに他の媒体に移植してもらう事で生きながらえる。

一般的に妖精は従者、妖精を扱う者はマスターと呼ばれている。

妖精（後書き）

妖精の設定はどうでしたでしょうか。

意味が分かった人、わからなかった人がいると思います。

分かった人はそれによって本編が楽しく思えると思います。・・・
多分。

分からなかった人は感想にて質問してください。

あと、割とどうでもいいことですが、偶に？妖精？が？要請？となつてかなり面倒くさかったりしました。

テスト前なので、次回の投稿は本編投稿で、5月の28か29辺りに投稿しようと思います。

軽く次回予告をしておく、次回は第4話の続きみたいなものです。

霊力（前書き）

こんにちは、アオです。
久しぶりの更新です。

別に忘れていたと言うわけではなく、機を窺っていたんです。・・・
本当ですヨ？

まあでも、これからはこっちのターンでして、暫くはこれを更新して
いこうと思っています。

今回説明するのは霊力についてです。

え、そんな説明必要ないって？いやいやそれが必要なんですよ。・・・
・多分。

それと、書き直した本編が中々のPV&ユニークアクセス
数がありまして大変嬉しく思います。この場を借りてお礼を言わせて
いただきます。

あと何故か『天使の仕事（旧）』が連載時とは違いこれまたアクセス
数が凄くありました。大変嬉しいのですが、自分としてはリニユ
ーアルした方を読んで頂きたい気持ちがあるので少し複雑な気分
です。

余談ですが短編を書いてみました。

興味のある方、お暇な方は読んでみて下さい。

霊力

アオ 『世界観設定第3弾』

アオイ「今回は霊力について説明します」

アオ 『今回説明する霊力は結構重要です。それが何故だか分かる？』

アオイ「もちろん。霊力は術を行使するのに使う力だからでしょ」

アオ 『正解。よく出来ました』

アオイ「これくらいだったら別に説明なんて必要ないんじゃない？」

アオ 『最初はそう思ってただけだね』

アオイ「だったらいいじゃない」

アオ 『でも後々詳しく説明した方がいいと思いついて……』

アオイ「ということは面倒くさい話になるの？」

アオ 『面倒くさいって言うな。でもまあ、あってるっちゃあある』

アオイ「ふうん。だったら早く説明しちゃいましょうか」

アオ 『あいよ』

アオイ「最後の方にまとめたやつを載せますので、それだけを見たい方は下までスクロールして

下さい」

アオ「しかし、今回もまた面倒くさい説明なので全部読むことをオススメします」

天使の仕事〜世界観設定〜 霊力

アオ「霊力は、考えるまでもないと思いますが術を使うのに使う力です。そして今回説明する

のは霊力の構成についてです」

アオイ「それって必要あるの？」

アオ「どうということ」

アオイ「いやだって構成を聞かされたってふーん、程度の感想だろうし、そもそも別に最初から

そんなの考えなくてもよかつたんじゃあ・・・」

アオ「一応意味はある。これを説明しておけば後々役に立つからね」

アオイ「ふーん、そうなんだ」

アオ「と、いうわけで説明を始めます」

アオ「霊力とは、霊子と呼ばれる霊的因子によって構成されてい

ます。そして霊子とは人々

の感情 怒り、悲しみ、喜び等といった感情の事です」

アオ 『ま、まずはこんなところかな』

アオイ「アオ、一つ質問していい？」

アオ 『どうぞ』

アオイ「霊子の元は人の感情って言ったけど他はないの？」

アオ 『他には、人の想いだとかもあるね。まあ要は思念が元となっている位の解釈でお願い

します』

アオイ「何か最後の方が投げやりだった気がするんだけど」

アオ 『気にするな。きつと気のせい』

アオイ「これは読者の人達は理解できたのかしら」

アオ 『すいません。もう感覚で感じたり捕らえてください』

アオイ「ものすっごい他人任せで適当ね」

アオ 『すいませんでした』

アオイ「もういいわ。次の説明に進みなさい」

アオ 『分かった』

アオ 『霊子は霊的な因子なので、霊体の構成や術の構成、他にも妖精の体の構成など、とにかく

くいろいろ使われています』

アオイ「ふーん。霊界にあるものや物体全てが霊子で構成されているって考えていいの？」

アオ 『まあそうだね』

アオイ「とりあえず、これまで出てきた情報を元に霊子について少しおさらいしましょう」

アオ 『よし』

アオ 『霊子は人の感情といった物で出来ています。例えば誰かが怒ったり喜んだりするとその

人からその感情を元とした霊子が大気中に放出されます。

普通の人は霊子を扱う事は出

来ませんが、霊子を（場の空気を）多少感じる事が出来るので、その霊子の種類に

よって気分や感情が変わったりします』

アオイ「なるほど。誰かが怒ったりして場の空気を重く感じたりするのはその霊子が原因って事

ね」

アオ 『そういう事。他にも誰かが嬉しかったりすると自分も嬉しくなる事があるじゃん、あれ

もそう』

アオイ「中々に凝った設定ね」

アオ 『でしょ』

アオイ「でも霊子の正体がそういうのだと霊体の構築とかに影響が出ないのかしら」

アオ 『それを今から説明する』

アオイ「ごめんなさい。それじゃ、お願い」

アオ 『霊体は霊子で構成されているといいましたが、使われている霊子はただの霊子ではな

く、純粋な霊子を用いています。純粋な霊子とは、感情などで汚染されていない霊子の

事です。水で例えると、純粋な霊子が真水で、感情などを元とした霊子は泥水です。

しかし、汚染された霊子も時間が経てば汚れも落ちて純粋な霊子になります。霊体の構

成などはそうした霊子を用いて構築しています』

アオイ「なんかだんだん難しくなってきたわね」

アオ 『面倒くさくてすいません』

アオイ「まあいいわ。それで、霊体の構築には純粋な霊子を用いるのよね」

アオ 『そうだね。でもそれだけじゃなくて妖精の体の構成とか霊

力も純粹な靈子を使ってる

『よ』

アオイ「・・・そういえばこれって靈力の説明だったわね。これじや靈子の説明じゃない」

アオ 『細かい事は気にするな』

アオイ「別に細かい事じゃないんだけど・・・」

アオ 『さて、次の説明に移ろうか』

アオイ「あ、話そらした」

アオ 『靈力は靈子の集合体ですが、靈子がなくては靈力を作る事も出来ません。しかし、靈子

は大氣中にあるので、それを必要な分だけ体に取り入れています。そうして取り入れた

靈子を靈力に変換して術を使ったりします。因みに、靈子を靈力に変換する作業は魂が

やります』

アオイ「靈力はどういうときに使うのかしら」

アオ 『術の行使や、靈体の維持、妖精の体の構築の維持とかに使われたりするね』

アオイ「そういえば妖精の説明でもそんなような事言ってたわね」

アオ 『これを読んだ後に妖精の説明を読むとさらに理解が深まる

と思うので、気が向いたら読

み返してみてください」

アオイ「今回の説明はこれくらいでいいかしら？」

アオ 『いや、あともう二つある』

アオイ「何かしら」

アオ 『一つ目は割りとどうでもいい事だけどね』

アオイ「それでもいいからさっさと言いなさいよ」

アオ 『霊力は魔力や妖力と呼ばれたりもします』

アオイ「・・・確かにどうでもいいわね。いや違うか、どうでもいいと言うよりは、説明する

タイミングを間違えてると言った方がいいわね」

アオ 『うん、自分もそう思う』

アオイ「ま、それは置いときましょう。それで、どんなときにそうやって呼び分けてるの？」

アオ 『魔術を使うときは魔力、妖術を使うときは妖力と呼ばれています』

アオイ「分けて呼んでるだけで、一緒なのよね？」

アオ 『そうだね』

アオイ「それで、二つ目は？」

アオ 『ああ、二つ目は割りと重要』

アオイ「へえ、何かしら」

アオ 『霊力の回復方法についてだ』

アオイ「・・・そういえば説明しなかったわね」

アオ 『ふふふ、今までとっておいてたのだ』

アオイ「へえ。・・・で、本音は？」

アオ 『忘れてました。すみません』

アオイ「そういう大事な事は忘れないでよ」

アオ 『気をつけます』

アオイ「もういいわよ、思い出したんだし。ほら、それより早く説明しなさい」

アオ 『分かった』

アオ 『霊力は時間経過と共に回復します。大気中のそこかしこに浮かんでいる霊子を体に取り

込み、魂を以って霊力に変換します。しかし、霊子を霊力に変換するのは魂にとっても

少し負担が掛かる作業なので、普段は負担が掛からない程度にしか変換はしません。こ

れは無意識のうちでも行われる作業で、例えるなら呼吸のようなものです。生きている

人は生きるために空気中の酸素を体に取り入れますが、その取り入れる成分が酸素から

霊子に代わっただけです。そして霊子を取り入れる量も睡眠を取ることによって多くな

り、食事を摂る事によって多少の霊力を回復させる事が出来ます』

アオイ「長い説明ご苦労様」

アオ 『ふう、これでなんとか終わらせられたかな』

アオイ「分かりやすい説明だったかは分からないけど終わったわね」

アオ 『うーん、まだまだ精進しないとなあ』

アオイ「当たり前よ。人は進む事をやめたら終わりなんだから」

アオ 『頑張らせていただきます』

アオイ「よし。じゃ、最後に説明を纏めたやつを載せて終わらせましょう」

アオ 『そうだね』

アオ 『それでは皆さん次回にまたお会いしましょう』

アオイ「さようならー！」

世界観設定 霊力

霊力 術の行使や霊体の維持、妖精の体の具現化・維持に必要な力。霊力とは霊子で構成されていて、それも純粋な霊子で構成されている。霊子とは人の感情や想いなどといった霊的な要因の因子で、純粋な霊子とは感情や想いなどが消え去ったものを指す。霊子は大気中に浮かんでいて、その霊子を体に取り込み、魂が霊力に変換する。霊力は前述の通り魔術や妖術、霊術などといった術を使うのに必要な力で、魔術などを使う場合は魔力、妖術を使う場合は妖力と呼ばれたりする。霊力は時間経過と共に回復する。回復の主な内容は、大気中に浮かんでいる霊子を体に取り入れて魂を以って霊力に変換する。他にも、睡眠を取る事により魂を少し休めて霊子を取り込む量を増やしたり、食事を摂る事により霊力を多少回復させるといった方法がある。

霊力（後書き）

いやー疲れた。

どうでしたか、ここで扱ってる霊力は他とは違うでしょうか？

え、変わらないって？またまたご冗談を。

でもその内ここに書いてある内容が変わる可能性があります。

何故かって？矛盾を作らないためですよ。

えー、まえがきでも書きましたが、自分は短編をば書きました。

内容はあまり書きませんが、まあ次回予告みたいなものです。

短編の使い方、書き方が間違っているような気がしないでもないで

すが気にしない方向で。自分は気にしません。

次話投稿は来週に出来たらと思っています。

では。

え、そんな説明必要ないって？いやいやそれが必要なんですよ。・

・多分。

あと余談ですが短編を書いてみました。

興味のある方、お暇な方は読んでみて下さい。

霊体（前書き）

なんでこんなものを書き始めてしまったんだ。

そんな後悔を胸に秘めている今日この頃。

何かもう会話部分いらなくね？とか、ちよっ、ここの部分かなり恥ずかしい、はっちゃけすぎた見ないでとか、いろいろ思っちゃったりしてしまうんですよ。

そしてこの文章を書いてても思いますね、「恥ずかしいから見ないで」と。

霊体

アオイ「天使の仕事、世界観設定、第4弾」

アオ「今回は霊体について説明します」

アオイ「いやー、何で4回目で紹介するのかしらねー」

アオ「・・・どういふ事さ」

アオイ「別に、普通は一回目が二回目辺りで紹介するべきじゃないかと思っただけよ」

アオ「ぐ、しょうがないだろ。本編で霊体の説明に入るのが少し遅かったんだから」

アオイ「それって要はアオの所為よね」

アオ「ごめんなさい」

アオイ「分かればよろしい。もっと計画的にいきましょうか」

アオ「頑張ります」

アオイ「それじゃ、はじめましょうか」

アオ「最後の方にまとめたやつを載せますので、それだけを見た
いは下までスクロールして」

下さい』

アオイ「でもそれだけを読んででも分かりづらいいと思いますので、私達の脱線ばかりする説明

(あまり脱線しないよう心掛けますが)も読んだ方がいいと思います」

天使の仕事〜世界観設定〜 霊体

アオイ「それじゃアオ、説明よろしくー」

アオ『ここで出てくる霊体は、霊子によって構成された体のことを言います。霊子とは霊的な

ものの因子です(詳しい事は霊力の説明をお読みください)
。そしてその霊子を寄せ集

めて形作った体が霊体と呼ばれます』

アオイ「ご苦労様」

アオ『じゃ、ここまでで何か質問はある?』

アオイ「これ書いてるのアオなんだから質問もなにもないんじゃない?」

アオ『そついう事言わない』

アオイ「それじゃあ、霊子はどつやって霊体を形作ってるの?」

アオ 『そうだね、じゃあその説明も踏まえて次の説明にいかが』

アオイ「そうなの、それじゃよろしく」

アオ 『霊体とはそもそも魂の入れ物のようなもので、生前の肉体の代わりのようなものです。』

魂はそれだけでは直ぐに消えてしまうので、生前の身体自らの情報を媒介として、生前の肉体に似

せた体を作り、それに宿る事によって自身の消滅を防ぎます』

アオイ「ここで補足をしますと、霊体は先程アオが言ったように生前の肉体を模したもののな

で、生前の自分の姿だったらいくらでも変わる事が出来ません。なので、霊力などの扱い

に長けている人は大抵若い体を使っています。特に女性」

アオ 『うむ、実に分かりやすい補足だね。特に最後の部分』

アオイ「だから霊界では見た目はまったく当てにならないのよね」

アオ 『まあそれでも話せば相手が年齢（見た目）を偽っているかどうか、何となくは分かるん

じゃないかな』

アオイ「それもそうね」

アオ 『よし、それじゃあ次の説明にいかが』

アオイ「よろしくね」

アオ 『霊体はその体の維持に常に霊力を働かせているので、霊力が切れたら霊体という殻をな

くした魂だけの存在となります。魂だけの状態を靈魂とい
い、靈魂は直ぐに霊体に宿る

かしないと消滅してしまいます』

アオ 『霊力とは術の行使に必要で、他にも霊体の維持など様々な事に用いられます。そしてそ

の霊力の元となるのが霊子というわけです。霊子はそれ単
体では何の力もありません

が、集める事によって霊力として活用する事が出来ます。

しかし、霊子を集めて霊力に

意識して変換するなどといった芸当は大変難しく、大抵の
場合は自らが自動で生成した

霊力を用います』

アオイ「なんか霊体じゃなくて霊力の説明みたくなくてない？」

アオ 『気にするな』

アオイ「気にするなって言っても・・・」

アオ 『前回のおさらいだと思えば大丈夫』

アオイ「・・・分かった。次にいきなさい」

アオ 『霊力の所でも説明しましたが、霊力の補給方法は主に三つ
あり、一つ目が前述した

？変換？、二つ目が睡眠を取る事により魂の変換効率を上げる？睡眠？（仮名）、
三つ目が食事を摂って多少回復させる？回復？（仮名）に分けられます』

アオイ「・・・」

アオ 『ふう、いい仕事したぜ』

アオイ「・・・」

アポ 『あれ、どうしたの？』

アオイ「（仮名）が多いわー！！！」

アオ 『うおー！！』

アオイ「名前が決まってないなら書くんじゃないわよ」

アオ 『すいません。でも一応書いた方がいいかなと思って・・・』

アオイ「そういう適当な事しないの」

アオ 『ごめんなさい。名前が決まり次第（仮名）とここの下りを消します』

アオイ「もちろんよ」

アオ 『気長にお待ちください』

アオイ「とりあえず次にいきましょう」

アオ 『説明するのはあと一つだけかな』

アオイ「お、今回は早く終わりそうね。それで、どんな事？」

アオ 『霊体と妖精の違い』

アオイ「よく分かんないわね」

アオ 『それを今から説明する』

アオイ「それもそうね。それじゃよろしく」

アオ 『霊体と妖精は違う所が二つあります。まず一つ目が、霊力の消費率です。妖精は霊体と

同じく実体をもつときには魂の情報を媒介とします。しかし、妖精は人とは違い生前の

肉体を持っていません。では妖精の体は何の情報を元に作られているかというと、妖精

は物に宿る時自動的に体を与えられているので、それを元に実体化しています。つまり

ところ、妖精は物に宿った時に体を自動で配布されていて、それを使っていると思って

ください』

アオイ「ねえ、今度は妖精の説明が入ってない？」

アオ 『すいません』

アオイ「しかもこの設定って妖精の所には書かれてなかったわよね」

アオ「忘れてました」

アオイ「またあ？」

アオ「本当に申し訳ありません」

アオイ「ふう、どうするのよ」

アオ「このままでいく」

アオイ「やり方がかなりずるいわね」

アオ「本当にすいませんでした」

アオイ「よし、じゃあアオ、説明を続けて。あれで全部じゃないでしょ」

アオ「分かった」

アオ「先程言ったように妖精は与えられた体を実体化するときに使っていますが、その体は燃

費が少し悪く、人より多く霊力を消費します。これが一つ目です」

アオ「二つ目が霊力の変換率です。妖精の魂は人とは違い無から作り出されたものです。妖精

はものに籠められた想いや経験、年月を元に作られた存在です。それと違い、

人（の魂）は生前に人間界で多くの思念などを感じていたので思念に対する抵抗力が強く、変換率は高いです。しかし、妖精はまだそんな経験はないので抵抗力が弱く、変換率は低いです』

アオイ「抵抗力って何かしら？」

アオ 『抵抗力と言うのは、人間で言う所謂免疫力です。思念に対する抵抗力が低いと、体は自分の体の安全を本能で守るので、思念を霊力に変換する量は低くなります』

アオイ「なるほどね。簡単に言うと人間は生きてる最中に思念に当たられ続けてるけど、妖精は生まれただけの赤ん坊みたいな存在だから免疫力が低くてすぐ具合が悪くなるって感じね」

アオ 『まあ大体そんな感じ』

アオイ「（妖精と霊体の違いは）まだあるのかしら？」

アオ 『うん、でも次の三つ目が最後。三つ目は割と簡単です』

アオイ「へえ。どれくらい？」

アオ 『説明するのに100文字も要らないな』

アオイ「簡単ね。じゃあお願い」

アオ 『霊体は霊視能力者、つまりが靈感ある人には視えますが、妖精は普段は霊子体であるた

め、靈感がある人でも微かに存在を感じ取る程度しか出来ません。しかし、実体を持って

ばちゃんと視る事が出来ます』

アオイ「えーと、・・・あ、本当に100文字無い」

アオ 『・・・おい』

アオイ「やだなあ、冗談よ。一応確認しただけでアオの事は信じてたから」

アオ 『その、最後の で全てが台無し、そして胡散臭くなるな』

アオイ「信じなさいって」

アオ 『・・・別にいいけどさ』

アオイ「そうそう。で、これで終わりかしら？」

アオ 『・・・多分。忘れてなければね』

アオイ「・・・思い出したら書き加えなさい」

アオ 『そうする』

アオイ「では最後にこれまでの説明を纏めたやつを載せます」

アオ 『ここまでお付き合いして下さい、どうもありがとうございます』

アオイ 『ではまた次回にお会いしましょう』

アオ 『さようならー』

世界観設定 霊体

霊体 魂の情報を媒介として、霊子で出来た体。魂の情報、つまり前世の体の情報を元に作られている体なので、若返りが可能しかし、それをするには霊力の扱いはもちろんの事、そもそもとして若返る事が可能、という事を知らないと不可能。なので若返っている人はいるが、数はそこまでではない。因みに若返ってる殆どの人が女性であるとのこと。妖精と人間には三つ違いがあり、一つ目が霊力の消費率。二つ目が霊力の消費率。そして三つ目が、霊視能力者（靈感がある人）に見えるかどうかです。

霊体（後書き）

えー、今回紹介いたしました？霊体？、如何でしたでしょうか。

『天使の霊界案内』では結構設定が暴露されたのでまだまだ続きません。

こんなもの書いてる暇があるならさっさと本編を投稿しろやカスが、と思った方、すいませんでした。出来る限り早くに本編の方も投稿したいと思っています。気長にお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3167t/>

天使の仕事 ~ 世界観設定 ~

2011年10月8日14時55分発行